

最初期バウハウスのヴァルター・グローピウスとデザイン行為の射程

—— 古典体操から農作まで

後藤 文子 (慶應義塾大学)

本発表は、バウハウス（1919年設立、ヴァイマル）の最初期に初代校長ヴァルター・グローピウス（1883-1969）が主導した公式カリキュラム外の諸活動に一貫した関心を認め、デザイン行為という一つの射程として明らかにすることを目的とする。ここに言うデザインは、個人の制作と美的形成に基礎をおく芸術作品が美的・感性的価値を規範として日常性を批判するのとは対照的に、集団による生産と機能的形成を基盤とし、有用的価値を受容の規範として生活世界／日常性を肯定する行為であり、その成果を指す。19世紀後半に登場し20世紀へと展開するデザインの重要性は分化した生活世界の総合性／横断性の再構築を目指した点に認められるが、本研究はこの基本理解を批判的に検討する。

考察対象は、従来互いに関連づけられることのなかった二つの行為である。第一に、1919年秋にグローピウスが直接交渉し、翌1920年1月にバウハウスに招聘した女性共同体「ローエラント」（1919年設立、キュンツェル）構成員による独創的なダンスと古典体操（Klassische Gymnastik）の実演、第二に、学生らの食生活支援を目的に1920年夏に始動するバウハウス菜園での農作である。後者は近年もっぱらJ. イッテンとマスダスナンの菜食主義に関連づけられるが、とかく農作行為それ自体の質を不問とする傾向が強い。そうした解釈に対して、発表者はむしろこれを本来の主導者グローピウスによるデザイン行為の射程に位置づけ直す。その論拠の一つが、実際に農作を担った二人の女性のうち、当時、R. M. リルケの文通相手であったリザ・ハイゼ（1893-1969）の存在である。『若き女性への手紙』（Rilke, *Briefe an eine junge Frau*, 1930）が記す彼女の足跡と活動を慎重に分析すると、20世紀初頭ドイツで広く普及した古典体操を包摂する生活改善運動が背景に浮かび上がるのである。発表者は、1919年夏のW. デターマンら学生グループによる第一案以降、菜園隣接地を念頭に農作と並行して展開するバウハウス・ジードゥルング構想の文脈でローエラント古典体操を検証する先行研究を参照しつつ、ローエラント財団アーカイブ他での近年の資料調査を踏まえ、このジードゥルング構想を介して後者を前者に接続する解釈を試みる。

本研究の研究史的意義は次の点にある。創立90年を機に飛躍的な進展をみたバウハウス研究の重要性は旧東独に所在する関連諸機関の研究者（U. Ackermann, T. Blume, W. Huschke, M. Siebenbrodt, V. Wahl）による徹底した資料批判研究にある。それらが形成するバウハウス一次資料研究史を踏まえ、現代のバウハウス研究は成立しないとの自覚のもとで、生活世界の総合性の再構築が如何に模索されたのかをデザイン行為という新たな視座で解明する。